The Japanese Institute of Landscape Architecture

論　説　編

滋賀県を事例とするまちづくりの実践についての考察

A Study on Community Design in Shiga

黒﨑　道雄*
*Michio KUROSAKI**

1．はじめに

まちづくりとは文献によって「街づくり」とも「まちづくり」とも表示され、それぞれハード、ソフトが語られているが、一概に前者がハードで後者がソフトであると定義づけられているものではない。まちづくりの内容も、都市計画や都市の基盤整備などのような公共主体による施策から、地域産業の振興という公共と住民との一体的な取組みや、地域の生活環境の保全といった住民主体による展開まで幅広い。

本稿は、滋賀県内における事例から、地域住民等がまちづくりを実践するにあたって基本となる事項を考察したものである。

2．まちづくりの実践における３つのキーワード

滋賀県内で行われているまちづくりの事例により、実践における３つのキワードを抽出することができる。

(1)地域の特性・魅力の発見

まちづくりを展開するには、まず地域の生活環境、自然環境、文化財、地域文化等を資産と捉えてその価値に着目する必要がある。

(2)まちづくりをリードする人々

地域資産を活用してまちづくりを進めていくなかで、まちづくりをリードする人々の力が大きい。そのため、キーパーソンの存在が欠かせない。

(3)まちづくり活動のための仕組み

地域の資産を活用し、キーパーソンがリードしながらまちづくりを進めていくためには、まちづくり活動のための仕組みが必要となる。

3．３つのキーワードの特性

次に、前述の「地域の特性・魅力の発見」、「まちづくりをリードする人々」、「まちづくり活動のための仕組み」という３つのキーワードについて、具体例によりその特性を述べる。

(1)地域の特性・魅力の発見

地域の特性・魅力の発見は地域におけるアメニティの発見といえる。アメニティ環境実現へのチェックポイントとして５つの視点が提案されている。[1)]

例えば、滋賀県内で棚田の存在する地域の特性・魅力をこの５つの視点から分析すると次のようになる。[2)]

①Physical――用・機能性――実用性、身体性

琵琶湖の西岸丘陵地には地すべり地帯が多いが、その中で棚田の稲作は、洪水や地すべり防止などの治水、利水のうえでも重要な役割を果たすとともに、地質、気候などの条件により、おいしい米を供給している。

②Visual――景・視覚性――景観性、美観性

斜面や丘陵地に作られた棚田は、正確な水平面とゆるやかな曲線、そして長い法面や高い石積といった地形的な美しさと、四季折々のうつろいの美しさがある。更に棚田に立って琵琶湖を遠望することの快適性がある。

③Ecological――自然性――生態循環性、生物性

琵琶湖から山地に至る河川流域中で、山裾に位置する棚田は、水と緑のネットワーク上の重要な拠点として、周辺の里山林、屋敷林、溜池などと一体となって豊かな生物層を保持してきている。

④Social――社会性――地域性、時代性

比良、比叡山麓の起伏の多い地形の中で、棚田は、平坦な農地を持たない山間住民が、何代にもわたって山を切りひらき築いた苦労の結晶である。そこには人々が農業的営みを通して培ってきた風土・文化がある。[3)]

⑤Mental――精神性――原風景性、ふるさと性

棚田は、田ならし、耕耘、田植え、稲刈り、稲干しなどの農作業により、四季を通じて多彩な景観を見せる。タガメやカエルなどの動物やヒガンバナなどの植物も生育し、四季折々の祭りなどの風物も、滋賀の原風景として絵画や写真となって表現されている。

(2)まちづくりをリードする人々

「まちづくりは人づくり」とも言われるように、まちづくりは地域をはじめとする人によってリードされ、まちづくりによって人が育ち、まちづくりによって地域のコミュニケーションが促進される。そこには、次のような特色がみられる。

①まちづくりを先導していく「町衆」の存在

とりわけ、伝統的な祭事や歴史的街道景観の保存などについては、町衆の存在が大きい。

②世代間の連携がうまく行っている

祭や運動会などの行事を通じて、中高年者、青年、子供といった世代間の連携、有形無形の伝統的地域資産の

＊滋賀県琵琶湖環境部自然保護課

＊Shiga Prefectural Government, Department of Lake Biwa Environment, Nature Conservation Division

NII-Electronic Library Service

The Japanese Institute of Landscape Architecture

引き継ぎが行われる。

③女性の活躍

水環境の保全や、農産物加工、販売などによるまちづくりにおいては、特に女性がリードする活動が顕著である。

④子供の参加

学校教育との連携による地域の自然観察活動や、子供が主役となる伝統行事などにより地域の活性化が図られる。

⑤情報をキャッチし、発進する人の存在

まちづくりの構想や戦略を考えるにあたって適切な情報をキャッチすることや、活動の成果を外部に発進することがまちづくりに活力を与える。それらを行うためにアンテナを高く掲げる情報マンの存在は大きい。

(3)活動のための仕組み

活動のための仕組みを構築していくにあたって、「何を目的としたまちづくり活動か」「誰が参加するまちづくり活動か」を前提として考えておく必要がある。次にこのような視点から３つの例を示す。

①景観の向上を目的とした住民同士の協定によるまちづくり

滋賀県では「ふるさと滋賀の風景を守り育てる条例」（風景条例）に基づき「近隣景観形成協定」制度が運用されている。この制度は、町内会などを単位として地域住民が自主的に建築物の形態、意匠、色彩の調和や敷地の緑化などについて取り決め、これを知事が認定し、県が技術的資金的支援を行うという制度である。条例が施行された85年度以来2000年度までに57の協定地区が認定され、それぞれ特色あるまちづくりが進められている。

②農村振興を目的とした都市住民との連携によるまちづくり

都会の人たちに農業を楽しんでもらいながら棚田の景観保全や地域の活性化を図ろうと、全国で「棚田オーナー制度」が運用されている。滋賀県でも、日本の棚田百選に選定された高島町畑地区において棚田オーナー制度を今年度から採用している。そこでは、各オーナーは約１ａの区画において田植え、稲刈りなどの農作業を年会費３万円で行い、収穫した米40ｋｇや地元特産の野菜などが獲られるもので、今年は県内外から21組のオーナーが参加した。この制度によって山間地における農業問題が解決されるわけではないが、地域の人々のむらづくり意識の高まりによる地域活性化が図られつつある。

③里山林再生を目的とした自由な参加による地域づくり

八日市市の愛知川河畔に生育する荒廃した里山林を対象として、楽しみながらボランティア活動を行っている「遊林会」は、市役所の職員がリードするオープンな団体で、地域内外の人々に自由な参加を呼びかけ、毎週竹や枯れ木の伐採、炭焼きなどを行っている。その活動によって里山林は再生しつつあり、最近近畿地方で絶滅したと考えられていた植物のハイハマボッスの存在も確認されている。

４．まちづくりのための連携と役割

今後のソフト、ハードを交えたまちづくりの実践には次のような連携と役割分担の認識が必要である。

(1)地域住民の役割

今後のまちづくりは行政主体ではなく、地域住民が主体となって進められるべきである。公共事業との関係では、批判的な活動から創造的な活動へと進む中でまちづくり活動の進展がみられる。近江八幡市の八幡堀など、河川改修や堀の埋立て反対運動などをきっかけとして、積極的なまちづくりの実践に移行している例も多い。

(2)行政の役割

行政は地域住民が行うまちづくりに対して、裏方としての役割が重要である。そのため、地域の特性や時代の背景からみた望ましい公共施設の姿を提示していくことや、行政の仕組みや事業の流れ、技術的情報などを的確に住民に伝えることなど、情報公開と説明責任の認識が必要ある。

(3)第３セクター、ＮＰＯ団体等の役割

財団法人淡海環境保全財団などの各種団体は、設立の趣旨に沿ったまちづくり活動に対し、協賛、後援、助成等を行うこと、地域が行う活動に対して人材の派遣を行うことこと、講演会、研修会などの実施によりまちづくりの実践に必要な人材の育成を図ることなどを行っている。今後も更に、まちづくりに対する積極的な関与が必要である。

(4)専門家の役割

地域が行うまちづくりの中で、専門的技術を必要とする取り組については専門家の役割は大きい。住民から依頼されたまちづくりを計画することや、公共事業などの計画案について行政に替わってわかりやすく説明することなどを、情熱と説得力をもって実践するプロデューサー、アドバイザーとしての役割は重要である。

５．おわりに

まちづくりは、目標が達成されることにより目に見えた成果が評価されるが、それと同時に活動のプロセスにおける地域住民がかかわる様々な取り組が、コミュニティを活性化させている。

まちづくりを実践していくには、それぞれの地域によってまちづくりの目標や地域の特性、住民の意識やライフスタイルなどがまちまちであるので、今後更に情報や事例の収集を重ねて考察していく必要がある。

引用文献

1) 進士五十八他編 (1994) ：ルーラルランドスケープデザインの手法・農に学ぶ都市環境づくり, 3, 学芸出版社

2) 黒崎道雄 (2000) ：棚田のアメニティ：アメニティ研究2, 46, 日本アメニティ研究所

3) 滋賀県琵琶湖環境部自然保護課：景観指針『（仮称）淡海風景プラン』策定調査報告書, 88

NII-Electronic Library Service